

俳雑

第12回

【芭蕉句と開高健】

八木 忠栄

何年前か前、野坂昭如が正岡子規について詳細な講演をしたのを聴いたことがあった。内容は忘れてしまったが、意外なとり合わせだと私は興味をかきたてられた。

最近、開高健のエッセイを読んでいる、松尾芭蕉の俳句からその食欲について書いている、そのことに注目した。開高氏らしい視点で芭蕉がとらえられている。俳句をいろいろと引用しながら率直な見解が述べられているのだが、おもしろいと私が思ったのは、榎本其角が詠んだ二句に芭蕉が返している、よく知られた句――

草の戸に我は蓼くふほたる哉

其角

↓あさがほに我は食くふをとこ哉

芭蕉

声かれて猿の歯白し峰の月

其角

↓塩鯛の歯ぐきも白し魚の店

芭蕉

これに関し、開高氏は俳聖が「其角の気骨を銜気としてたしなめている」として、返す芭蕉の句を「あまりの凡句なのでちよつと吹きだしたくなる」「月並み」とまで評し、「凡凡の凡」「素直、無飾、直下が俳句の真髓なんだゾ」と弟子をいましめているのかも知れず、「よくわからない」と書いている。さて、諸家は？